



# 楽々亭通信

第 37 号  
発行: NPO 法人 没イチの会・京都  
令和5年11月1日号

## 十月の楽々亭を

### 開催いたしました

本願寺派布教使

安堂芳雅

「年末年始の挨拶状に思うこと」

こんにちは、安堂です。

ここ数年、「十一月号は「喪中はがき」について書きたい」と思っていました。が、なかなか書くことができませんでした。が、どうやら今年は間に合いました。

#### ■年賀礼状

年末ぎりぎりになって、まだ半分、あと何枚と宛名書きをしている時は「年賀状なんて面倒な習慣、どうしてあるんだー」と思っても、いざ年が明け、もう身になるとやっ



ぱり嬉しいのが年賀状です。

その歴史を調べると、平安時代に始まるようです。

新しい年を迎えるにあたって、お世話になった人や親しい人に挨拶をして回る習慣があります。

しかし、遠方に住んでいるなど、何らかの理由で直接の挨拶が難しい場合は、書面で挨拶をすましてしま、それが「年賀状」とよばれました。

そして徐々に、直接挨拶をしに行くことができる相手に対しても、年賀状を送るようになり、明治時代には今の年賀はがきスタイルが定着してきました。

#### ■年賀欠礼葉書

郵便局のホームページに、

「その年に近親者が亡くなった場合は、必ず年賀状をやりとりしている方へ喪中はがきを出すようにしましょう」とあります。前もって年賀欠礼の葉書（喪中はがき）を出すことも今では習慣となっています。

そもそも、「喪中」とは、喪に服するという風習からの言葉です。

近親者の死を悼し、魂を鎮めるために慶事（おめでたい）ことを避けることを「喪に服する」、またその期間を喪中といえます。

ですから、喪中はがきは故人が亡くなったことを知らせるものではなく、喪に服している最中なので、おめでたい新年の挨拶を控えることに対するお詫び状です。

■私も義理の父が亡くなった時は出しましたが、

よく考えてみると、  
①わざわざ先回りして、相手の年賀状発送をストップさせてしまう必要が果たしてあるのか。

②特に浄土真宗では、死ぬことは必ずしも悲しむべきことではなく、ましてや不吉なことでも忌み嫌うものではないのに、どうして「おめでどう」と言っ

たはいけないのか。  
いろいろ考えると、何も考えず世間の慣例に縛られていた自分に気づくことができました。

しかし、そうはいつでもねえ・・・世間の慣例だからねえ、というお方もいらつしやるでしょう。

そこで、私なりにもらって嬉しい挨拶状を考えてみました。

喪中はがきを出す場合は、決まった印刷文面だけでなく、家族を亡くした想いや、どうぞ、あたたかな

年をお迎え下さい等、相手をお慰めする言葉を添えられてはいかがでしょうか。短い言葉を添えるだけで死亡報告通知のような葉書が、亡くなった方をご縁としてつながっている、あなたと先方の心が通う葉書にかわります。

また、喪中はがきを受け取った方も、何がなんでも年賀状を出してはダメというわけではありません。新しい方を亡くされた年です、ただでさえ淋しいお正月に、毎年届く年賀状がこないと余計に淋しいものです。

「お淋しいお正月と存じます。」という言葉が添えられた年賀状が届いた時は、なんだか嬉しかった・・・と言ってお下された方がありました。

また、今年、奥さまを亡くされた男性は、

「時間が経つにつれ、悲しきは浅くなってきたけれど、淋しさが深くなってきました。」とおっしゃっていました。

目度合い、楽しい、嬉しい、に便乗したい私たちですが、転じて自分の身となると、最もわかってほしいのは、「淋しさ」のようには思いません。



か？  
人生でお金はどれくらい必要

10月の楽々亭は「人生とお金」の題で話し合いました。

ある方は人生でお金は当然大切でなくてはならないものとおっしゃっていました。

確かに現代の資本主義経済では、物々交換は影を潜め、金銭がその仲介をするわけですから、

何を手に入れようとしてもお金がないと手に入りませんね。ではどれくらいのお金があればいいのでしょうか？この問いには人それぞれで、年間に300万円は必要という方や、金額はわからないけど生活が出来ればそれでいいという方もおられます。

私が問題にしているのは、お金に自分自身が振り回されないかということ。欲望は尽きないので、例えば車がほしいから300万円を今すぐにほしいと思ってもない時はどうするのでしょうか。まさか盗んでくるわけにも行かないですね、世間では詐欺が流行っています。それもこれもお金がほしいという欲望と執着の最終段階の行動ですね。お金に関わる問題は時代が変わっても尽きない問題です。お釈迦様は人間にとって最大の問題は、悟りを開く最大の障壁は、「執着心」だと言われていますね。人間に欲望と執着心がある限りお金に関しては悩みが尽きないものと言えるようです。私は高校時代にこの話を聞

いて、自分はお金に振り回されない人間になろうと、その一環として貯金を一切しないことを心に決めて今まで生きてきました。未だに貯金0円です。それがいいかどうかは、それだけで判断できる問題ではありませんが、私はそうして生きてきました。30代40代にお金が沢山入ってきた時がありました。常に貯金は0円でした。

こんな生き方はお勧めできるものではありませんが、私の人生観ですから仕方ないですね。皆さんは、最後に幾ら必要と思つて貯金をしてこられましたか？

ただこれだけは言えることですが、その人にとって使えるだけのお金があればそれ以上は不幸になる要素が大きいということ。無くても嘆いている方がいれば、私は言います。

「人生お金がなくても、なんとかなるものです、つましく真面目に過ごしていればどこからともなくお金は入ってきます」私の経験から得た結論です。

籠谷 弘

### 楽々亭 11月の予定

11月17日(金)

西京区役所洛西支所会議室

午前10～12時

10月に開催した場所です。



### 楽々亭通信

発行元：NPO法人 没イチの会・京都

住所：京都市西京区大枝北沓掛町一丁目5番地2-406

TEL：075-874-5320 FAX：075-874-5328

MAIL：kago@botuichi.com

●楽々亭通信では、皆様の投稿を募集しております。身の回りの出来事や体験談など、何でも結構です。楽しかったこと、つらい思いをしたことなど、様々な胸の内を皆様と共有して行きたいと考えております。